

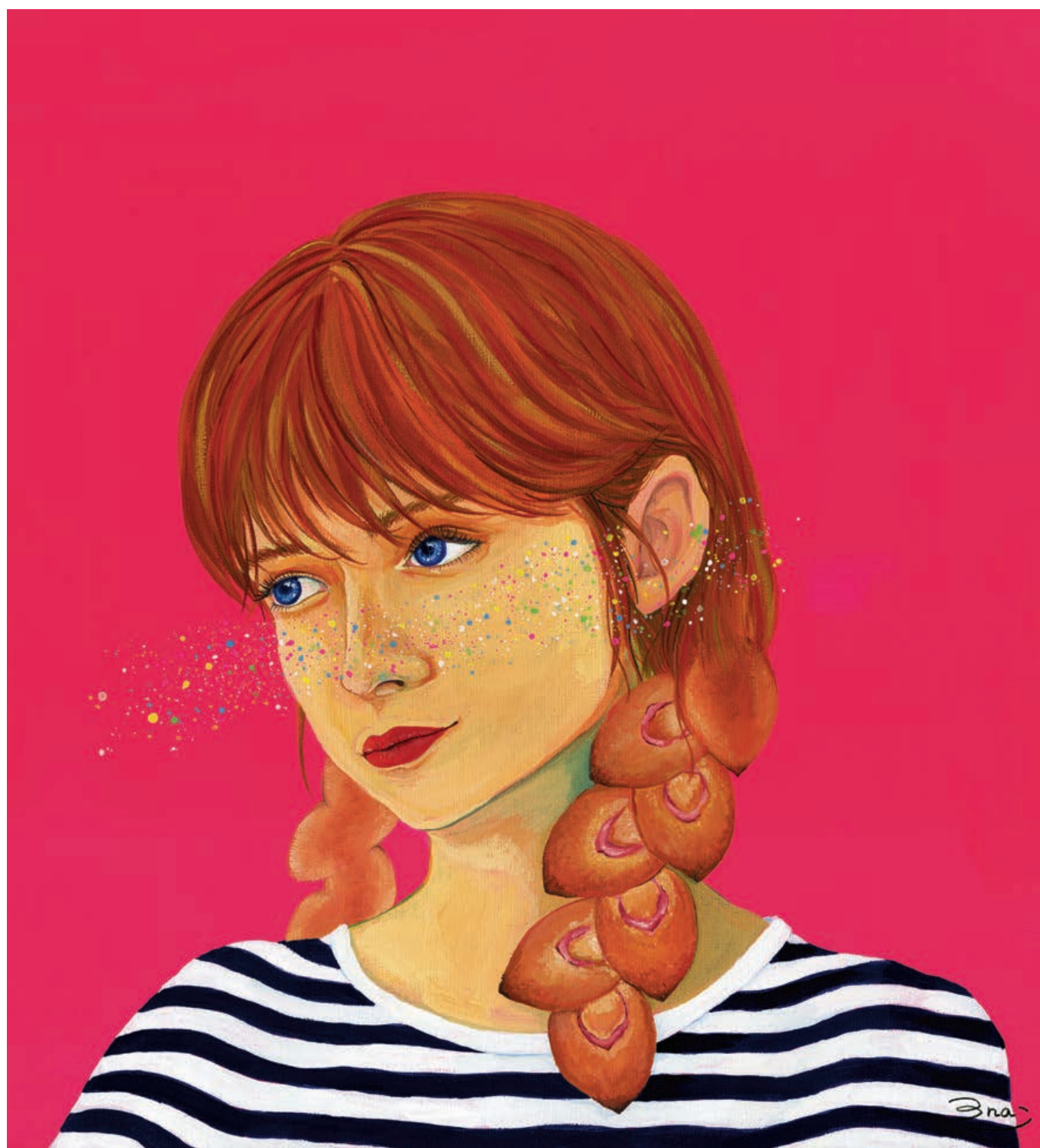
つなぐ

ふるさと宇和島／南予

秋号

2026 No.36

ご自由にお取りください



特集

三間町 毛利家

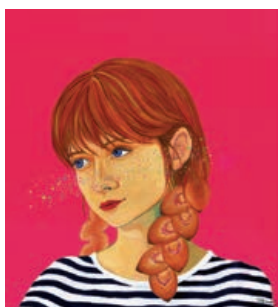
● インタビュー 道の駅みま 支配人 岩本順子

「出会った人たちに導かれ、今の私がここにいる」

つなぐ 2026 September 秋号

C o n t e n t s

- 01 エッセイ「スペース・グッチのよもやま話」 石口 孝治
- 02 インタビュー 道の駅みま 支配人 岩本 順子
「出会った人たちに導かれ、今の私がここにいる」
- 04 特 集「毛利家」 宇和島市文化財保護審議会 会長
予土歴史文化研究会 副会長 宮本 春樹
毛利家史料調査会 会長
- 09 旧庄屋毛利家を守る会について 旧庄屋毛利家を守る会 会長 安岡 賢司
- 10 第37回 みま町コスモスまつり
- 11 中山池自然公園イルミネーション
- 12 「ありま三なこ」
- 14 「スプネ（丸木舟）」にまつわる物語 宮川 淳一郎
- 15 撮り歩きなんよ 「紅葉筏と良寛句」 写真家 北濱 一男
- 16 文ちゃんどつぽの
予土線のあの人に会いたい 17 竹本精作さん
- 18 いのちのはなし
グーチョキパー 17 「小学生と水産高生で、お魚料理に挑戦しました！」 毛利 弘子
- 19 南予の祭り歳時記 小原の五ツ鹿踊り 愛媛大学地域協働センター南予 副センター長 大本 敬久
- 20 医 療 「在宅医療について」 沖内科クリニック 副院長 沖 良隆
- 21 食めぐり 「伝統行事と行事食を楽しむ」 管理栄養士
柑橘ソムリエ 和田 広美
シーフードマイスター
- 22 お気楽俳句 小野 更紗 / (絵) 律川 エレキ / おすすめ本 岩崎書店
- 23 つなぐ美術館 ベにばら画廊/アトリエばれっと
- 24 うわしん若手経営塾OB 若だんな ②④ 有限会社 安岡蒲鉾店 取締役 安岡 弘和
- 25 斗酒百篇 / 4コマ漫画「きさいやくん」



表紙 / 「ベーコンエビガール」
作 / ありま三なこ

プロフィール

1987年生まれ 愛媛県宇和島市出身
子供の頃から絵を描くことが好きで、大学の卒業制作で、しかけ絵本を作り、それから絵本に興味を持つ。2016年第8回 be 絵本大賞受賞、絵本作家デビューを果たす
現在は個展やイベントへの出品等で活躍中



(撮影/北濱一男)



つなぐ秋号 No.36

〒798-0041 宇和島市本町追手 2-4-10

0895-23-7000

年4回発行（季刊誌）

配布先 / 宇和島信用金庫各営業店ほか

発行 / 宇和島信用金庫

編集・構成 / 業務推進部 広報文化室 川尻純滋

本誌掲載内容の無断転載を禁じます

私が、伊方町三崎に越してきて、もう5年目になる。最初の3年間は、地域おこし協力隊として、三崎高校の中の公営塾で数学や物理を教えながら、地域との関りを模索していた。そうした中で、中学生のための学習塾をこの三崎に作るうと考え、伊方町と相談しながら、協力隊の任期の終わる1年前に塾としての形ができ「みさきフロンティア塾」と名付けた。それから2年、がむしゃらに塾の指導に打ち込んだ。授業形態は、対面で行う従来の形式と、オンラインでの授業と、ふたつの形式でやっている。対面もオンラインも一長一短があるが、これからも、地域の方々の要望を聞きながら、長く指導を続けて行きたいと思っている。

伊方町は東西に細長い半島にある、全国でも珍しい町である。その半島のほぼ中央に「佐田岬半島ミュージアム」という伊方町の歴史、文化、地理等を総合的に集約している博物館がある。

とあるきっかけで、私が「XMAや国立天文台との繋がりがあつたことを館長に伝えると、星好きの館長が「ぜひうちの屋上で星空観望会をやらう！」と提案してきた。それから4回程、星空の大きなイベントがある時を狙って星空観望会を開催してきた。その時の私のペンネームとして「スペース・グッチ」と名乗るようになった。星空観望会は、天候次第で中止にせざるを得ない。悲しいことに、昨年度は4回中3回中止となった。2回目の中止の時から参加者に申し訳ないので、来て頂いた方々



スペース・グッチのよもやま話

石口 孝治

に科学工作をして楽しんでもらっている。今年も4回の星空観望会を計画しているが、5月のミニマム・ムーン観望会は久しぶりに大成功に終わり、ミュージアムのスタッフの方々も感動してくれて、私も胸が熱くなった。8月の第2回星空観望会は、ペルセウス座流星群の観望会を予定している。昨年は天候不良で中止になったが、今年はりベンジしたい。

私は、地域おこし協力隊の任期は終了しているが、伊方町との話し合いで「会計年度任用職員」として、週3日、三崎高校公営塾で数学と物理を主に理科全般を教えている。その中で、高校側からの依頼で「未咲輝ゼミ」なる課外活動としての探求の1パートを任されている。

私がやっているのは「みさきエネルギーゼミ」といって、エネルギー全般のことをしっかりと理解していきながら、何か面白いことをやらう、という趣旨のゼミ。

その中で、生徒の発案で「太陽光でピザを焼こう」という話になり、私の以前関係していた大学等において、直径1.5mのパラボラ反射鏡を作った。それで昨年の文化祭で実際にピザを焼いて来場者に試食をしてみらった。

持続可能な世の中となるのが叫ばれている昨今として、こうした装置を常備してその使い方をトレーニングすることは、理にかなっていると思う。今年度は、一学期に校内のヤマモモの実を収穫して太陽光だけでジャムにした。酸味のある美味しいジャムになった。二学期三学期は、廃棄され



石口 孝治 いしぐち こうじ

宇和島市津島町出身 宇和島高等学校卒業
東京大学と核融合研でプラズマ核融合を研究
元 原子力規制委員会 原子力規制庁 上席放射線防災専門官
前 伊方町地域おこし協力隊 三崎高校 公営塾講師
現 三崎高校 公営塾非常勤講師
現 伊方町環境監視委員会 委員
現 みさきフロンティア塾 代表
趣味：家庭菜園、料理、俳句（いつき組）

る割り箸から太陽光で炭を作り、それを使って電池を作り、災害時の携帯の充電ができるようにしていく計画だ。携帯の充電には大電力が必要となるが、そこをクリアできる工夫を生徒たちに考えてもらいたい。

私は、家庭菜園を趣味としている。今年初めてゴーヤに挑戦した。ネットを張ろうと思ったが、畑の脇に生垣があったので、そこに這わせて栽培したところ、見事に成功して、既に10本のゴーヤの実を収穫でき、今も15本の実が生っていて収穫が楽しみだ。

最近、自分の自由を楽しんでいる。ある意味運命を天に任せている部分もある。これからも、我儘とは、また違う自由な生き方を模索して、人生を楽しみたい。

夏雲や行き先決めるコイントス
カンガガワ孝川

「出会った人たちに導かれ、今の私がここにいる」

道の駅みま 支配人 << IWAMOTO JUNKO 岩本 順子

今回は、「新米まつり」直前のお忙しい中、「道の駅みま」の支配人 岩本順子さんにお話をうかがった。

平成15（2003）年7月にオープンした「道の駅みま」は、三間地区の玄関口として多くの利用客に親しまれている。

岩本さんは、東京生まれ東京育ちの生粋の都会人だ。地元の高校を卒業し、就職した会社の役員の一人が宇和島東高等学校卒で、自身の母校から社員を雇いたいと言ったことから、同校卒の3人が入社してきた。そのうちの一人が岩本さんと同じ部署に配属になり、後に岩本さんのご主人となる。

当初、ご主人両親から地元（三間）に帰っても就職先もないし、岩本さんの両親からも「愛媛には行かないよね」と釘をさされていたが、長男を出産後、「子育てには三間は最高だし、歳をとってからの田舎暮らしには不安があつたので…」と一念発起し、三間移住を決めた。

移住後は、郵便局のパートとして仕事をしていたが、二男の出産に伴い退職。その後、三人目を出産して、仕事を探していたところ、長男が通う保育園の先生から「道の駅みまが事務員を募集しているから受けてみたら」とすすめられパートの事務員として働くことになった。

移住して以降、義理の両親が子育て

での手助けをしてくれていたが、突然、義母が他界。仕事を辞めるかどうか悩んだが続けることを選択した。

その後、平成22（2010）年、松浦友昭さんが二代目支配人として着任し、徐々に仕事量も増え、パートから正社員になった。

それまで苦しい経営が続けてきた「道の駅みま」だったが、三間ICが開通したこに加えて、松浦さんが推し進めた「道の駅みま」と「みま米」のブランド化によって、業績はみるみる改善していった。

事務員という立場ではあるが、松浦さんの仕事ぶりを間近でみることでできたことは、今の仕事に大いに役立っていることは間違いない。

そうして、平成31（2019）年、松浦さんの退職に伴い、支配人代理という肩書ではあつたが「道の駅みま」のリーダーとしてのスタートを切ることになった。

支配人代理とは言え、初の女性リーダーとしてスタートを切ったが、予想はしていたものかなり風当たりは強かった。それでも、松浦さんがすすめて来た道の駅運営のノウハウは頭に叩き込まれていたし、それをなぞって行けば大丈夫と自分に言い聞かせた。

そして、令和2（2020）年、最大の試練、新型コロナウイルスの感染の広がりは、とうとう三間にもやってきた。とにかく『コロナ』つ

て何？から始まり、バイキング形式で運営していた食堂のトングの使いまわしが出来なくなり、結果、運営していた女性グループは撤退を余儀なくされた。当然、客足は止まり、売り上げは激減、収益は赤字に転落した。

まずは、前支配人がやって来たことを教科書に道の駅運営をやっている、徐々に自分なりの道の駅運営にシフトしようとしていた矢先のパンデミックに、ただただ呆然する毎日だった。

そんなさ中、師と仰いでいた松浦前支配人が松野町の「道の駅虹の森公園まつり」の総支配人に就任し、ライバルとなった。それまで、前支配人の足跡を辿りながら仕事をすすめてきたが、いよいよ自分の足で歩を進める時がきた。

とは言え、日々「どうしよう」と悩む日々が続いた。そんな中、前社長（玉田光彦前副市長）が親身に相談にのってくれた。

そして、道の駅みまが開業から20周年を迎えるタイミングを迎えた。これまで、前支配人の方針で周年イベントは開催していなかったが、さすがに20周年ともなると、やらないわけにもいかないだろうと悩んだ。

そこで、玉田前社長に相談したところ、「とにかくやってみれば」と背中を押された。

そうして、「道の駅みま」として初

の周年イベントを成功させることができた。

最後に今後について聞くと

「昨年、防災道の駅（物流拠点）に選定されたんですが、いざ防災となると、営業中ならお客様もいらっしゃるし、立地的にも避難して来る方もあると思うので、その方々に何らかの支援が出来る仕組みをつくりたいと思っています。そして、もう一つが、道の駅は地元のモノを販売する場所ですが、それを担う農家の方々の高齢化が進む現状を踏まえて、いかに魅力的な売り先になるか、していきけるかということを考え、実践して行きたいと思っています。そして、そうすることで、若い農業従事者や移住して農業をやろうとしている人にプラスになれば、微力ながら地域の人口減少に貢献できるんじゃないかと思っています」

各地の道の駅が、それぞれの特色を前面に出し、しのぎを削っている中、三間ICに隣接する「道の駅みま」は、宇和島と四万十川への愛媛県側の玄関口でもあり、特産の「みま米」は愛媛県を代表するブランドとなっている。今後は、岩本支配人の更なる奮闘を期待したい。

インタビュー・構成／川尻純滋



〈プロフィール〉 1971 年生まれ 東京都中野区出身



道の駅みま 全景



お食事処 おだいし庵



畦地梅太郎記念美術館

道の駅みま

■営業時間 9:00 ~ 18:00 1月1日のみ休業 0895-58-1122

安岡蒲鉾 道の駅店・お食事処 おだいし庵・テイクアウトぼーの（営業時間は店舗により異なります）

併設：畦地梅太郎記念美術館・井関邦三郎記念館 9:00 ~ 17:00（最終受付 16:30 毎週火曜日休館）

特集 毛利家



旧庄屋毛利家住宅は、宝暦3（1753）年築であり、本年度築273年を迎えた。三間盆地の西端に位置する吉田藩（これみ）の庄屋であり、江戸末期においては、家数42軒、田23町、畑4町、石高351石と平均的規模の村であった。

愛媛県下では17世紀中頃の築と推定される真鍋家住宅（四国中央市重文）が最も古い民家とされる。壁の柱が自然木のままなので間違はなく最古である。毛利家は、それに次ぐ古さと考えられるが、大修理を経ずにそのまま建っている家としては県下最古と思われる。

最近、香川大学創造工学部の釜床美也子准教授が、学生らと天井裏に上がって建物の構造を調査してくれた。それによる直屋（長方形の普通の家）に、角屋を強引に建て増しをしていると判明した。その構造は非常に古風であるという。簡単に言えば、松丸太の丈夫な軸組に、茅葺き屋根が上に乗っている単純構造である。これは地震の際に本体と茅屋根が別々にしなり、力をいなく構造である。

毛利家の由緒書からたどれば、下にあった古い庄屋敷を現在地に上げ、角屋を付け足したものと推定される。理由は、^{*}一列並び型という一段と古い形式の間どりが見えるからである。この古形式の民家は、椎葉（宮崎県、祖谷（徳島県）という山深い山中に残っているだけである、つまり1753年の時点で、^{はりだ}梁桁、柱類は再利用であり、さらに古い建物なのである。木造建築は、手入れさえすれば、このように300年を超えて住み続けることができるのである。

ちなみに宇和島城天守は、寛文6（1666）年頃の築である。築100年を経過した頃から、盛んに部材を取り替えた。腐った部分を除け、そこに新しい材をはめて継ぐのである。築200年の幕末には大痛みとなり、万延元（1860）年に大修理をした。さらに100年たつて、昭和37（1962）年に解体大修理を行った。

毛利家もあと十数年後の葺き替えの際に弱った部材を取り替え、現代的な耐震補強をすれば、次の補修まで50年以上はそのまま使用できる。古建築の保存修理には、一時的に多額の経費がかかるものであるが、使用可能年数の長さを考えれば安いものとも言える。

また、松の太木がほぼ存在しなくなった現在では、同じ家を建てることはできない。



宇和島市文化財保護審議会会長
宇和島市歴史文化研究会副会長
毛利家史料調査会会長

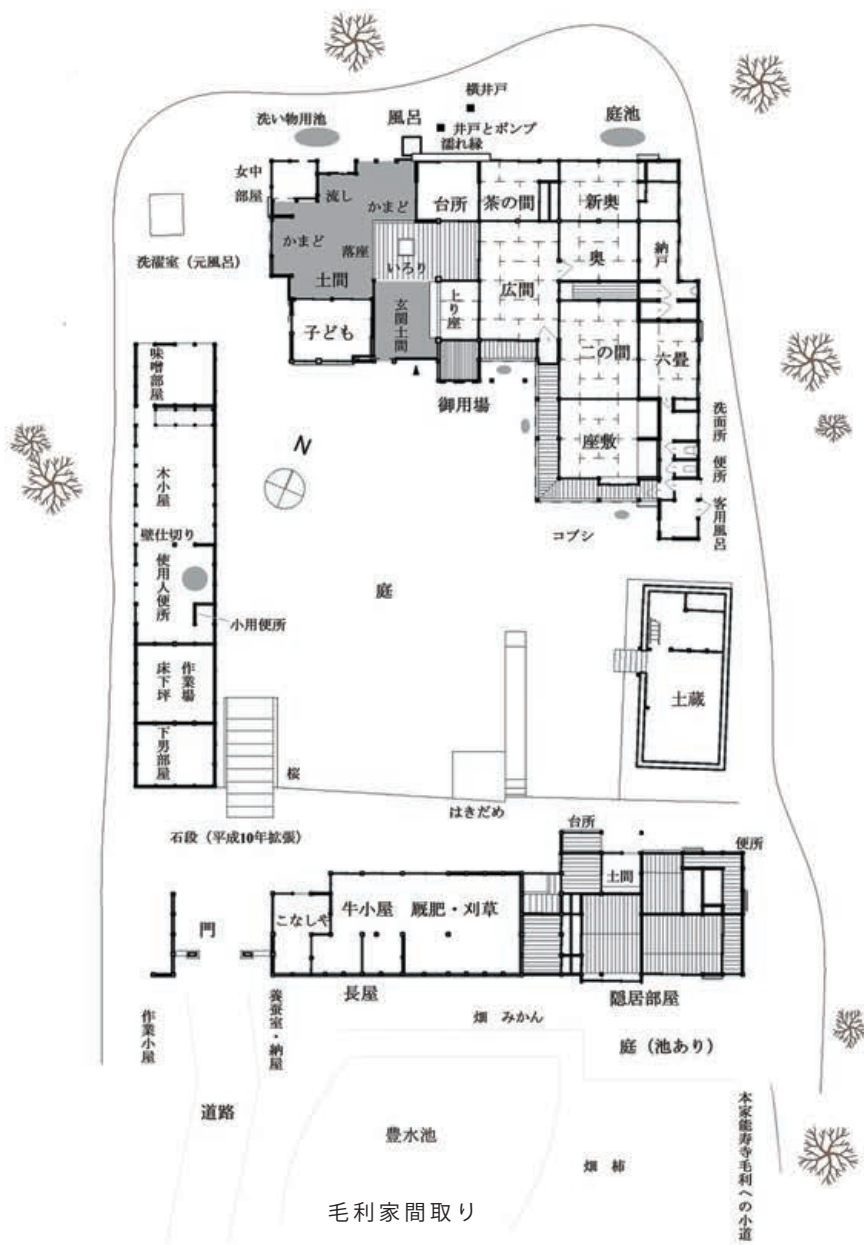
みやもと はるき
宮本 春樹



毛利家全景（宇和島市教育委員会提供）



毛利家主屋（撮影：宮本春樹）



* 1) 土間横に同じ大きさの部屋を横に並べ、後ろ側を押入にしてふさぐ。前側には縁をもうけて部屋間を行き来する。襖を外せば、横長の一つの大きな空間になる。

立地

三間には日本最古の農書『清良記第七巻親民鑑月集』がある。戦国期から江戸初期の農事が描かれているが、まだ、三間にため池がない時代である。

上農（農事に秀でた百姓）の住まいを次のように定義する。

背後に山をひかえ、前には水田が広がり、左側には水の流れがあり、右側に畑を配し、先祖伝来の畑を家の周りに配置する。

毛利家の立地は、まさにその通りで、家の背後の森がためる水を生活水に使い、さらに家の下の池のため、その下の水田を潤す。家の周りの丘には畑を配し、麦や大豆を作る。森を起点として家を作るのである。

こうして、日本最古の農書に理想として描かれた農家が今に残るのである。

毛利氏の歴史

現在の松野中学校の近くの古井城にいた重実氏という小土豪が祖であるようだ。豊臣秀吉の四国平定後、領地を没収され、しばらく閑居するが、目黒村（松野町）に庄屋職を得て移る。それを機に毛利氏を名乗ることになった。当時の目黒は、滑床から下る冷水のため作柄の乏しい村であった。

明暦3（1657）年、宇和島藩から3万石が分知され、吉田藩が成立した時、目黒村は吉田領になった。それは、3代目長左衛門の時である。そして、直ちに、宇和島藩と吉田藩の滑床山を巡る争いに巻き込まれた。

出来たばかりの吉田藩から陣屋建設用の木材伐採を滑床で伐るよう命じられたのだが、行ってみると、宇和島城下の杣衆が先に伐っている。宇和島側は、天主再建のため材を必要としている。役人が付き添っており、こん棒を振り回して目黒村民を追い払った。お家騒動に近い形で無理矢理吉田藩が分離したのだから、宇和島藩は譲るつもりは無い。

目黒村は、藩御用木伐採と山の管理を行い、報酬として得られる薪を売って生計を立ててきたので、暮らしがなりたない。吉田藩役人に訴えるが、役人は現場には来てくれない。「殿様同士はご兄弟ゆえ、がまんしてくれ、他に木材を伐れる山はないのか」と言っばかりである。他の山では雑木が生い茂り、さらに高所から丸太を下ろす木馬道を作らねばならない。山は幾世代もかかって育てるものである。

*2) 中世から近世にかけて日本の山林で木の伐採や材木の加工などの林業に従事した専門の職能集団（山仕事の専門家）

とうとう、長左衛門は幕府への訴訟を決意する。願書に「地頭は当座に候へども、百姓は末代にて候」と書いた。つまり、領主様は、次々お変わりになります。そして、一時治めては去って行かれます。しかし、私共百姓は、末代までの地で暮らさねばならないのです。どうか私の村の暮らしが成り立つようお願いします、という意味である。

戦国期の河後森城主渡辺氏から数えて、小早川、戸田、藤堂、富田、宇和島伊達、吉田伊達と七人目の殿様なのである。



目黒ふるさと館に展示されている重要文化財の「目黒山形（模型）」
（撮影：宮本春樹）

裁判のために作った山形模型を、分割して村人たちと背負い、はるばる江戸まで、乞食同然の姿でたどり着いたという。裁判は目黒村と隣村宇和島藩次郎丸村が滑床山の薪と刈草の入会を巡って争っているという名目で受理された。両藩の意地を

除外して、二つの村の暮らしが成り立つようにという判断で裁許された。

この結果、滑床山の森林資源は公平に二分され、吉田藩主宗純は、「長左衛門、よくぞ勝ってくれた」と大喜びして褒美を下さった。滑床山の西半分は宇和島藩領となったので無事天守も完成した。同時に大手門も建てられた。

この時、吉田藩、宇和島藩、土佐藩の国境が確定したため、藩名を記した3本の杭を頂上に打ち込んだ。よって滑床山の中央の頂きを三本杭と名付け、今日に到るのである。

長左衛門の子の一人が三間の能寿寺村の庄屋となり、さらに尾村庄屋毛利家が分家で成立したものである。

庄屋の仕事

平成5（1993）年、家に伝わる古文書を読み解きたいと毛利家史料調査会が発会した。江戸時代からの文書2000点以上が残っていた。以来、33年、ほぼ毎月古文書を読む会が続ぎ、令和8（2026）年7月で、第335回例会を行った。講師は第1回から柚山俊夫（現伊予史談会会長）である。

古文書から庄屋の仕事を見てみよう。弘化2（1845）年、初めてお国入りにした吉田藩藩主宗孝が、慣例の巡在（領内視察）を行った。毛利家に来たのは旧暦1月25日、おりしも大雪の後で、庭は融けなかった雪でどろどろの状態であった。庄屋

與八郎（24歳）は、村人一同を率いて、庭に平伏した。座敷には、藩主宗孝、家老、郡奉行、御中見役（村々担当）が並ぶ。殿様より、書き付け（農事に出精せよと書かれてある）が渡されるのであるが、すでに両手は雪と泥だらけである。

御中見役様に、手を見せて目で哀願すると、庭に降りて来て、與八郎の懷に書き付けを入れてくれた。こうして、万事失態無く終えることが出来た。



雪の毛利家（撮影：北濱一男）

宗孝は宇和島藩主伊達宗城の実弟で、旗本山口家の出身であった。江戸っ子なので、国元には滅多に来ず、散財をつくし、最後まで幕府派であった。官軍が江戸に向かってもお、朝廷に恭順を示さず、宗城からの連絡で、家臣一同、急ぎよ江戸に走り、ご隠居して頂いたという話である。

文久元（1861）年、この年は春先から順調に降雨があった。6月13日（以下新暦換算）、入梅となり小雨が降った。是房村の田植も世話無く済んでおり、今から梅雨の大雨が予想される。そこで、源蔵（與八郎から改名）は、村の水源である車地池（1680年築造）の水位を満水から1尺下げておくことにした。これが油断であったと後悔することになった。以後54日のカンカン照りとなった。

池には8番栓まである。7月5日、1番栓を抜いて村中の田に水を渡らす。水を止めては流し、7月29日、水位は4番栓まで下がった。村人に昼夜8交代の水路見張り番を命じた。こうしないと誰かが自分の田にだけ水を引き入れてしまうのである。水が抜けぬよう再度の畦塗り^{あぜぬ}を指示、それが済むと、6番栓手前まで水を抜いて止めた。そして、7日間耐えた。黒割れの田の土が乾いて白割れとなってきた。村人の顔も青ざめている。もはややむなし、6番栓以下を抜いて、全ての水を使い切る決断をした。氏神での雨乞いが届いたか、奇跡的に8月7日喜雨、川に半分ほど水が流れ出した。以後、潤雨が適宜あり、9月19日、稲（品種名山城）の穂はおおはらみとなり、一転して、この年は満作となった。

このように村を預かるのが庄屋職である。

毛利家保存の歩み



元彦妻珪子の嫁入り（1958年12月14日）。毛利家には、4代分の「婚儀控帳」が残っている。先代の祝言は1924年5月30日で、夜8時、花嫁の提灯行列が坂を上ってきた。昔の婚礼は夜行われたのである。

珪子（2023年没）と主を失ったが、令和6年、今度こそ宇和島市への寄付がなり、現在は、宇和島市指定有形文化財「旧毛利家庄屋住宅のうち主屋及び長屋・門」として、宇和島市の所有となっている。

守る会会員は管理委託を受け、軽トラに草刈り機やチェーンソーを積んでやってくる。時には、茅屋根補修を職人と一緒に屋根にあがる。平均年齢は70歳となったが、あと10年は大丈夫である。

20数年この家の茅ぶきを守ってくれている川上義範棟梁（梶原町在住 79歳）は、現代の名工に選ばれている。



1998年に全面ふき替えを行い、その後2019年に前面、2021年に後面をふき替えた。（撮影：宮本春樹）

古民家をどう守るのか知りたければどうぞ見学にお越しいただきたい。

常に家内に風を通すこと、囲炉裏を焚くこと、人が室内にいて空気を攪拌^{かくはん}することが大切である。家が湿気を持つと、白蟻が地面から這い上がり、大規模に発生してしまうのである。

家は人が護るだけではもたない。家を囲む木立ちが、風を和らげ、風雨を防ぐ。この30年、台風がきても雨戸を閉めたことがないのである。こうして、家は森によっても護られているのである。



囲炉裏の煙は茅屋根を乾燥させ長持ちさせる。火を囲んでの語らいは心が和むものである。

（撮影：北濱一男）

毛利家の今

7月15日に成妙小学校^{なるたえ}の高学年児童が、総合的な学習「毛利家プロジェクト」発表会を毛利家でしてくれた。守る会や地域の人が目を細めて聞いた。

その前の週は、東雲女子大学^{あそみ}の学生たちが、毛利家の蔵にしまつてある衣類を調査、虫干しをしてくれた。大正期の花嫁衣装や庄屋源蔵が殿様をお迎えした時の羽織袴も保存しているのである。学生達は、毛利家で昼食を作り、蔵のお椀で会食をした。

その前の週は、香川大学の釜床研究室、宮本研究室が来てくれて、家の測量と耐震調査であった。耐震調査では、天井裏の隅々に測定器をつけて、揺れを図ってくれた。これに基づいて耐震対策をする予定である。

8月には、愛媛大学の学生が、予土線沿線地域の魅力を再発見するという調査研究で来てくれる予定である。10月末には、ドリルマスモト氏^{じいしかぎ}による彫刻展があり、今年は、囲炉裏の自在鉤^{じいしかぎ}に吊す木製の魚が氏の作品に置き換わる予定である。囲炉裏端で語る民話を計画しているためである。



「水神」ドリルマスモト彫刻展より（2025年於毛利家）
毛利氏由緒書には、淵から浮き上がった大蛇（水神が姿を変えたもの）に遭遇したが懐に入っていた先祖伝来の守り刀が鞘から飛び出して大蛇を再び淵に鎮めた物語が記されている。

11月は、地域の人と子どもが集まって恒例のつるし柿作りがある。12月には、江戸期の門松を再現した門松作り、3月からは雛人形、五月人形飾りで、地域の人が集って楽しむ。恒例の琴演奏会もあり、蔵の江戸期の琴も虫干しを兼ねて出演である。



毛利家にある「山葉」製の古いオルガン（撮影：北濱一男）

秋には、東雲女子大学の学生と成妙小学校の児童による長生きオルガンコンサートも予定している。オルガンの保証書は、古文書として蔵にあり製造元は「山葉」と判明、製造後100年もたっていたが、ヤマハが修理してくれたものである。



毛利家の秋の風物詩 吊るし柿（撮影：北濱一男）

毛利家は大正年間に、ガラスを入れ、現在の姿にリフォームされている。そして百数十年前の家が家具そのままに残っている。家人が田畑にでて留守のような佇まいである。

縁側に座ると、静謐な空間となり、障子に反射する光が柔らかく美しい。

今、原稿を書いている7月末は、純白の木槿が門の前に咲いて人を迎えてくれる。9月は彼岸花が家を取り囲む。早春の梅、水仙から始まって、山茶花^{さざんか}、桜、藤、シャガ、黄鳶^{きんぎょ}、山つつじ、紫陽花と年中花が咲き続ける。

年年歳歳花相似たり
歳歳年年人同じかからず

このような漢詩がある。花は咲き続け、

家は何百年も残っている。やがて次の世代がこの家に憩い、集うことになるであろう。守る会も調査会も次に護ってくれる人を待っている。西暦2053年の築300年祭には、もう我らはいないが、きつと脈わっていることであろう。

見学のごあんない



「道の駅みま」から松山自動車道の高架を潜って西へ車で数分、駐車場あり

Drill-masumoto 彫刻展”

～時間の深い場所に立つ～

会 期：10/26(月)～11/3(火)

(10/30(金)は休館)

「毛利家を守る会」「毛利家史料調査会」

新入会員募集中!

連絡は、毛利家史料調査会 宮本春樹。

連絡先 ✉ kakiwra@gmail.com

旧庄屋毛利家を守る会について



(写真：上) 毛利家の吊るし柿〈撮影：北濱一男〉(写真：下左) 毛利家の庭で吊るし柿をつくる (写真：下右) ひな祭りイベントでの琴の演奏〈写真提供：宮本春樹〉

「旧庄屋毛利家を守る会（以下：守る会）」は、地域住民が農村文化を守るため平成7（1995）年6月に会員113名で発足しました。

目標は、昔の姿の茅葺き屋根に戻すことでした。
*むしべよしと 故藤部吉人さんのご尽力により、大野ヶ原で茅刈りがスタートし、屋根の材料や大工等、地元の方々のご協力を頂くことになりました。必要な資金は町内を中心に寄付を頂き、3年間で準備ができ、平成10（1998）年10月に修繕工事に着手、11月に会員の協力により完成し、一同、最高の高揚感を味わいました。

完成後は、大勢の人が見学に来てもらえるよう仕掛けを皆で考え、実施しました。
平成16（2004）年には、長屋門と納屋の修繕を行い、その後、高速道路工事で出た残土を頂き、駐車場が完備できました。現在は、各イベントと毛利家周囲の環境を良くするため草刈りや小木を切ったりしています。

「守る会」の活動は昨年、30周年の大きな節目を迎える事ができました。これもひとえに、毛利家の方のお人柄と各会員が来観者に気持ちよく観て頂きたいという強い気持ち、そして会員同士の意思疎通ができていたからだと思っています。

令和6（2024）年6月13日、旧庄屋毛利屋敷は、宇和島市に寄付が叶いましたが、今まで通り保存活動に努めています。「守る会」の運営資金は会費と見学者からの寄付で賄っています。会員を少しでも増やし、脆弱な運営資金ですが、少しでも会員の皆さんの労をねぎらうことができれば良いなと思います。

皆さまのご協力をお願いいたします。



旧庄屋毛利家を守る会
会長
やすおか けんじ
安岡 賢司

*）1946 三間町生まれ 1972 イタリアで彫刻を学ぶ。大理石の産地であるカララにアトリエを構え、ミラノ、ローマ、ドイツ、デンマークなどで個展を開催。世界各地の彫刻シンポジウムに参加する。1983 帰国。四国カルスト大野が原で制作活動。2013 永眠 道の駅みまにある代表作「森の魚」→



第37回 みま町コスモスまつり



開催場所 成家地区の水田（植え付け面積 約 50,000 m² 本数約 450 万本）

開催期間 2026 年 10/17(土) ～ 11/8(日)

同時開催 『東祖谷・天空の村 かかしの里』かかしさん大集合！！

イベント 2026 年 11/1(日)10:00 ～ 15:00（雨天中止）

- ・人気のキッチンカー大集合 ・三間町婦人会「たこ焼・みま米おにぎり」
- ・北宇和高校三間分校「みま米ライスバーガー」販売
- ・縁日コーナー（輪投げ、射的ほか）

第 37 回目となる「みま町 コスモスまつり」を三間地域の豊かで優しさ溢れる自然の中、愛媛県内は勿論のこと四国四県の中でも最大級のスケールによるコスモスの花で訪れる人の心を癒す空間づくりに努めます。

今年も会場は成家地区を中心に植付け面積約 50,000 m²で展開いたします。同時開催として成家地区のコスモス畑と地域の拠点である「道の駅みま」の 2 会場で徳島県東祖谷・かかしの里から「かかしさん」を招聘、地区住民も衣類提供等で「まつり」に参加し、地域一体となった取組みで来訪者にホッとする時間と空間を提供いたします。

11/1(日) イベント当日は恒例となった大人気のキッチンカーによるストリートグルメも交えて旧成妙保育園駐車場で展開いたします。

主催／みま町コスモスまつり実行委員会・宇和島市

後援／宇和島市教育委員会・愛媛新聞社・NHK 松山放送局・南海放送・テレビ愛媛・あいテレビ・愛媛朝日テレビ・FM 愛媛 宇和島ケーブルテレビ・FM がいや



写真撮影／北濱一男

■場 所 中山池自然公園（宇和島市三間町）

■開催期間 2026 年 11/23（祝）～ 2027 年 1/9（土） ＊点灯式…11/22（日）

■ライトアップ時間 18:00 ～ 23:00

■イルミネーション花火 2026 年 11/22（日）・12/27（日） ＊林野火災アラート発令の場合は中止

「この公園に、夜の光を灯せたらどんなに綺麗だろう」

吉田三間商工会青年部が地域活性化と交流を目的に掲げたこの挑戦は、今年で 26 年目を迎えます。知識も予算もない手探りの状態から始まったこの取り組み。当初は部員が一人 1 万円を持ち寄り、わずか 3,000 球ほどで飾られた、ささやかな光でした。休日に集まった部員が手作業で 1 球ずつ配線し、試行錯誤を繰り返しながら灯したその小さな光こそが、すべての原点です。

それが今や、地元の三間中学校・北宇和高校三間分校の生徒たち、そして地域のみなさんが手を取り合い、約 20 万球を飾る大きなイベントへと育ちました。四半世紀を超えて地域みんなで繋いできた「手作りの輝き」が、今年も中山池自然公園全体をどこよりも温かく照らし出します。

今年の点灯式は 11 月 22 日（日・予定）に開催されます。当日は地元中学生によるプラスバンド演奏やダンスが会場を盛り上げるほか、ネットトヨタ瀬戸内さんによる災害時に電源として使える EV 車からの配電による 10m ツリーの点灯も予定されています。カウントダウンとともに、真っ暗な公園が一瞬にして光の世界へと変わるあの感動の瞬間をぜひ現地で体感してください。

さらに、これまで好評を博してきた「イルミネーションと花火」の一夜限りの共演が、今年はバージョンアップ！点灯期間中に 2 回にわたって実施される予定です。澄み渡る冬の夜空を彩る大輪の花火。そして、イルミネーションの輝きが静かな水面に映り込む幻想的なコラボレーションは、息をのむほどの美しさで訪れる人を魅了します。

26 年間、世代を超えて地域が一体となって紡いできた光の絆。澄んだ冬の空気の中、家族や大切な人と一緒に、三間の夜を彩る温かな光に会いに来ませんか。

イルミネーション取り付けボランティア募集中！

今年の思い出に、あなたも光を灯す側になってみませんか？

初心者やご家族での参加也大歓迎です。自分たちの手で取り付けけた電球が夜空に輝く瞬間の感動を、ぜひ一緒に味わいましょう！

＊詳しくは ☎0895-58-2256 まで

■中山池イルミネーション実行委員会

（事務局：吉田三間商工会 三間支所）

798-1112

宇和島市三間町宮野下 863 ☎0895-58-2256

ありま三なこ

絵本作家・イラストレータ



2016年6月、「ウォールズ」という絵本で絵本作家としてデビューし、今年で10周年を迎えることができました。絵を描くことが好きという気持ちだけで、基礎も何も身につけていなかった私は、作家一年目から自分の実力のなさを痛感する日々でした。いきなり大きな会社の方とお話をしたり、あれよあれよという間に仕事の話が進んでいったり。期待に応えられなかったことも、自分の作風を否定されたこともありました。自分が好きなように描くことと、求められるものが、必ずしも一致するとは限りません。それでも10年間、描き続けてこれたのは、私の絵を「好き」と言ってくれる人がいたから。そして何より、宇和島の皆さんが背中を押し続けてくれたからです。

今回の個展は、6年前と同じく、3ヶ所を巡る巡回展となります。6年前はちょうどコロナ禍と重なり、来たくても来ることができなかった方もいらっしゃいました。今回は、その時の分も思い切り楽しんでいただきたいという思いを込めています。

私にとって、宇和島での個展は特別な意味があります。東京や大阪とはまた違った場所だからこそ、個展を楽しみに足を運んでくださる方との距離が近く、直接お話しできることも楽しみのひとつです。これまで応援してくださった宇和島の皆さんに、今度は私から「楽しい時間」を届けたいと思っています。これまでも、クイズや投票、くじ引き、塗り絵など、作品を見るだけではない楽しみを個展に取り入れてきました。特に小さなお子さまにも、普段なかなか見ることのできない原画を間近で見てもらい、遊びながらアートを身近に感じてもらえたらと思っています。

今回の個展のタイトルには、イモムシのようにゆっくりでも、一歩ずつ確実に歩んできた10年間への思いを込めています。10年間の感謝を込めて、何度でも遊びに来たくするような、楽しい個展を作りたいと思っています。

ありま三なこ

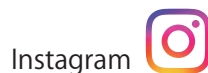


- ・個 展「イモムシみたいなスピードで。」
- ・日 時：2026年 **10/30(金)～11/3(火)**
10:00～18:00 (最終日は16:00まで)
- ・場 所：フジグラン北宇和島店かがやき広場



HP

<https://www.arima3nako.com/>



Instagram

<https://www.instagram.com/arima3nako/>



「スブネ（丸木舟）」にまつわる物語



↑宮川さんのガレージに保管されていた時のスブネ



（前略） 椰子の実では

ありません。名も知らぬ漁労家族が嵐に遭って漂流したのか、人々の暮らしが染み付いた丸木舟です。これを、そのころ宇和島青少年が唯一 独習の場にして、いた旧藩公伊達家図書館の庭に持ち込み、さらには壮大な夢を伝えようと、展示してくれた社会教育家がいました。

彼は名を森岡捨松（一八七九〜一九三四号・天涯）といいました。日振島に生まれ育ち、二十年ばかりアメリカで単身苦闘し、帰国してからの後半生を、郷里の更生に捧げた人物です。（後略）



評伝 森岡天涯
（木下博民著 創風社）

昭和36（1961）年生まれの筆者が小学生の頃、お城山（宇和島城）周辺は、子どもたちの遊び場で、特に丸之内和霊神社やお浜公園・南予護国神社には大勢の子どもで溢れていた。その中の南予護国神社の本殿に向かう石段の途中に小屋根の下に吊るされた古い丸木舟があったことは覚えて

スブネが南予護国神社に展示したあった頃の様子（作：宮川淳一郎）→

（評伝 森岡天涯より一部抜粋）
序章 流れ着いた丸木舟

戦時中、伊達図書館に防火用水槽を造るため鶴島神社（現…南予護国神社）に移され戦火を逃れた。そして、いつの頃からか神社の石垣と倉庫の間に半ば捨て置かれていた。それを救ったのが海岸に流れついた漂流物を絵のモチーフにしている宇和島市在住の画家 宮川淳一郎さんだ。

＊）明治12（1879）年宇和島市日振島に生まれた日本の社会事業家・社会教育家。20年におよぶアメリカでの苦闘の末に帰国後、私財を投じ郷里の自力更生や社会福祉・教育の発展に生涯を捧げた。「大きな石は俺にもてころ」は天涯が遺した言葉で、「大きな石」とは、人々が厭う仕事や社会的困難を表し、「困難があるなら私のところにもってきなさい」という、奉仕と社会貢献の志を示したもので宇和島市立住吉小学校の校訓になっている。



スブネをモチーフにした宮川さんの作品



宮川淳一郎さん

「三角の屋根が直接スブネの上に被さるように置かれて、中には漫画本や枯葉がたまり、ゴミ

同然のようで、このままだと2、3年で腐ってしまふと思いましたが」と当時の様子を語る。

丸木舟は、平成19（2007）年2月、宮川さんが譲り受け、自宅ガレージで保管することになった。そして、その後の調査で、奄美大島で造られたスブネ（丸木舟）と分かり、令和元（2019）年、同島にある原野農芸博物館が「スブネ」を受入れてくれることになり、宮川さんによる送別の展覧会が開催された。

そして、今年、11月、宮川さんの個展が開催される。

宮川 淳一郎 展 - SUBUNE etc. -

2026 11/26 Thu. - 12/3 Thu.



火〜金 12:00 ~ 17:00 土〜日 10:00 ~ 17:00（最終日 15:00 まで）＊月曜日は休廊

会場 / Atelier Palette GARO. (アトリエぱれっと ガロ)

撮り歩きなんよ

北濱一男が撮りためた南予の風景



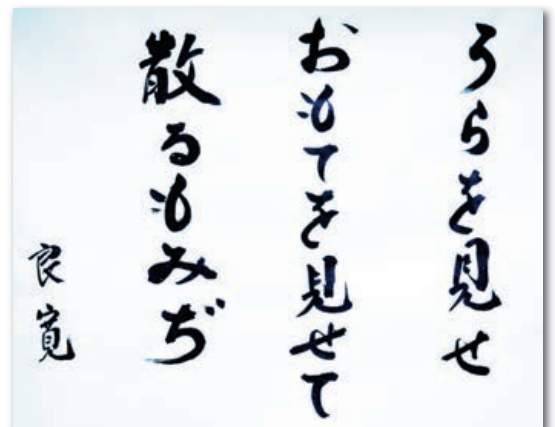
もみじいかだ

紅葉筏と良寛句（津島町）

津島町清満に二重柿で知られている臨済宗妙心寺派の満願寺があります。紅葉の季節になると山門横の掲示板に墨色鮮やかに和尚さんが書く良寛の句を鑑賞するのも楽しみです。

境内の大銀杏は、枝を切り落として幹だけになっていました。伺ったところ折れたら危ないので切ったそうです。

また、境内の隅にある池の傍にはモミジの木があり、秋になると紅葉した葉っぱが落ちて池を埋めます。池に浮かぶ紅葉筏だけでも綺麗ですが、風で動くさまは、また別の美しさがあります。ただ、わずかな風でも葉が動くので、三脚を立てて動くモミジの葉を長時間露光で撮影しました。



北濱 一男 写真家

1945 年生まれ 宇和島市在住 学生時代からカメラをはじめ、本格的な写真歴は約 20 数年
奈良県明日香の写真家 上山 好庸（うえやま よしのぶ）氏に師事

「撮り歩きなんよ」（ブログ）<http://uwatu.blog135.fc2.com/>





文ちゃんどつぽの 予土線のあの人に会いたい17

文 / 山下 文子
写真 / 坪内 政美



最寄駅は「近永駅」

たけもと せいさく

竹本精作さん



手書きのきつぷを作成する竹本さん

「予土線に近永駅あり」と言わしめる理由がある。それは、ほとんどが無人駅の予土線において、有人の「きつぷうりば」があるのは近永駅だけなのだ。そのきつぷがまた手書きで発行してくれるものだから、チケットレスの現代社会において、その貴重さたるや、筆舌に尽くしがたい。

きつぷには、鉄道旅のすべてが詰まっていると
言っても過言ではない。一枚のきつぷから、その
人の人生がちよっとだけ見えてくる・・・なんて
言つとロマンチックすぎるだろうか。

「いやあ、この仕事をしよるおかげで、北は北海道
の俱知安から南は鹿児島島の指宿まで全国各地の人
がここに来てはきつぷを買っていくんだよ。『どっか
ら来たの?』『神奈川かな、うちの親戚がおるわい』

とか、きつぷを作りながらおしゃべ
りするのが楽しいんだよ」と話すのは、
元国鉄職員の竹本精作さん（75歳）。
「60歳で定年して、もう14年間くら
い近永駅に居るねえ。自宅もすぐそ
こやしね」と子どもの頃から予土線
には親しみがあるという。

「20歳くらいかな、車掌しよった頃は
ね、朝7時過ぎの通勤列車は6両編
成で伊予宮野下駅や務田駅まで行く
と車内の通路は歩いて通れんくらい

人がいてね。8時台になると洋裁学校に通う女の子とかで人がいっぱいだった」と懐かしむ。

予土線が人々の生活を動かし、日々の営みを支えていた時代。せわしない乗車時間を想像してみる。もちろん今も学生や地域の人々も利用しているが、せいぜい2両編成の通学時間帯が1日のピークになるくらいだろうか。満員の車内なんて自分の間見たことがない。それでも竹本さんは、鉄道は地域の人たちにとって大切な存在であることを肌で感じているという。

そして続けて、「最近ね、近場の爺ちゃん、婆ちゃんが乗らなくなった・・・みんな亡くなったんだよ」と衝撃的な状況を寂しそうに話し始めた。

「名物というが、いつも乗るお客さんがおったんよ。あのお婆ちゃんいつも乗るとるな、とか、あの人は松丸の温泉に行くんよな、とかね。病院に行ったり、買い物に行ったり、親子でリュックサック背負って来たりね」と、竹本さんは駅を利用する人たちのささやかな日々のひとときをちよつとだけ共有しているようだった。

駅で降りる人々の顔を思い出しながら、その人たちの人生をちよつとだけ優しく見守ってきたのだ。見かけなくなると、どうしたのかなと気に掛かる。有人のきつぷ売り場だからこそ感じられる人のぬくもりだ。



実は竹本さんは、私の同級生のお父さんだった！！

そうこう話をしているうちに、列車が近永駅にやってきた。すると、2人組の女性が降りてきて、駅のまわりをきよきよろしている。「きつぷですか？」と竹本さんが切り出すと、女性は「いえ、昔この近くに住んでいたものですから、もう何年ぶりにやってきたんです」と話す。たちまち昔話に花が咲き、その女性と竹本さんの自宅が近所だったことがわかった。かつてあった商店や近所の人の話など、懐かしさに包まれた時間だった。



駅で偶然会ったお二人と一緒に記念撮影～ご縁が繋がりました

「ちよつと近くを歩いてみますね。ふらつと来たのにこんなご縁があるなんて」と女性は、うれしそうに笑みをこぼした。「記念にきつぷを買ってもいいですか」と片道きつぷを受け取り、それを大事そうにそつと財布に入れていた。

「こんなこともあるんやね。かつてのご近所さんに会うなんてね」と竹本さんも穏やかに微笑んだ。

やっぱり駅には人がいてほしい。キップを買う時間も愛おしい。小さな紙のきつぷに宿る思いこそ、その人の大切な人生そのものだ。

現在、旧駅舎は解体され、目下新しい駅舎が建設されている。聞けば、前面がガラス張りで、かつての切妻屋根の駅舎を思い起こすようなデザインだという。竹本さんのいるきつぷうりばも残る。「あまりお金がなくてもいいから、居心地のいい駅になってほしいね。毎日わたしも掃除してね、きれいにしとくけんね」と利用する人に寄り添う竹本さん。

これからも変わらぬ笑顔とぬくもりが駅に脈をもちたしてくることを願っている。



長年人々を見つめてきた近永駅の旧駅舎よ、ありがとう



山下 文子 (やました あやこ)

宇和島市出身、鬼北町育ち
予土線沿線は県をまたぐも「ザ・生活圈」。鉄道を始め、乗り物は何でも大好き 座右の銘は「その角を曲がれば、旅」(※永六輔氏のうけうり)
「四万十の鉄道 予土線」のホームページでコラムを担当



坪内 政美 (つぼうち まさみ)

スーツ姿で撮影するという奇妙なこだわりをもつ鉄道カメラマン・ロケコーディネーター 各種鉄道雑誌などを執筆する傍ら、テレビ・ラジオにも多数出演。町おこし列車「どつぽ列車」を主宰し、駅スタンプを製作・寄贈する活動を行っている
予土線利用促進対策協議会アドバイザー

四万十川の
鉄道よどせん



協力：予土線利用促進対策協議会

いのちのはなし グー チョキパー 17



「小学生と水産高生で、お魚料理に挑戦しました！」

文 / 毛利弘子

なんと、なんと！ 小学校3年生から6年生の子どもたちが、30cm以上もある鯛を最初から最後までしつかりと切り分けることが出来ました。周りでみている私達大人は、「大丈夫？手を切らないでね！」等々、はらはらドキドキの時間でした。高校生が、しつかり横で包丁や鯛に手を添えながら、実に丁寧に根気強く、そして、優しく励ましてくれながらの作業でした。

各班から拍手と共に高校生の「出来ました！さあ、次は、ここを切ってみよう、頑張ろう！」の声が聞こえてきます。実に、教え上手、褒め上手。きっと、学校でも先生方からこうした指導を受けているのでしょう。時間をかけて最後までやり遂げた子どもたちの、安堵と満面の笑顔をみて、一番安心したのは、私達周りの大人でした。

計画したときは、子どもたちが、ここまで出来るとは思っていなかっただけに、緊張しながらも驚きと感動の時間でした。みんなで試食しながら、「いつもより、ずっと美味しいね！」と、子どもたちや高校生の満足した顔も印象的でした。「家では出来ない体験ができました」と、参加されていたお父さん達の感想に、「良く、辛抱強く見守って下さいましたね」と、声を掛けてしまいました。

和霊公民館の「夏休み和霊子ども教室」で「水産高校生と魚料理に挑戦してみよう！」を開催しました。以前、私が鯛のさばき方を教えてもらった時の感動と地元にある水産高校の活動をもっと知ってもらいたいとの思いから企画しました。

この提案に水産高校の「水産食品研究部」の生徒さん13名と先生方2名が全面的に協力していただき実施すること出来ました。その上、以前からご縁を

いただいていた「公益財団法人・えひめ女性財団・愛媛県男女共同参画センター」さんが協賛して下さい、予算面で全面協力をいただきました。財団さんは、地域団体が実施する研修会の企画を募集して、多方面で応援して下さいる事業を実施されています。当日は、松山からお二人がきてもらい、最後まで参加して下さいました。「良い企画でした、久しぶりに小学生や高校生と一緒にできて、とても楽しかったです」と、笑顔で帰られてホッとしました。

この日のメニューは、「鯛めし」と「うしお汁」、高校からのプレゼントの「ぶり大根」の缶詰もありました。高校生は調理実習の前に、鯛に関するクイズも準備していて、子どもたちの興味関心を盛り上げてくれました。

最後に宇和島水産高校の学校紹介もしてもらい、学びの内容や、将来の進路についても話をしてくれました。「みんなも、一緒に学びませんか！」の一言に彼らが楽しみながら充実した学校生活を送れていることが伝わってきました。計画・打ち合わせ、準備を進める中で、先生方が常に話されていたことは「高校生に任せますので」でした。その言葉どおり、当日は高校生が主体的に的確に、きびきびと進行してくれる姿が、とても頼ましく安心して見ていられました。その裏には先生方のご指導があったことは、間違いありません。

「楽しかった、美味しかった！」の子どもたちには、やり遂げた充実感と自信が少しでも夏休みの思い出として残り、地域の皆さんに支えられ守られている日々を感謝することも感じてほしいと思った一日でした。もちろん、私も感謝！感謝でした。



毛利 弘子プロフィール

1952年生まれ 公立小中学校養護教諭を40年経験後2012年定年退職

ライフワークの性教育の講演や全国大会での研究発表多数

●受賞／平成24年愛媛県学校保健功労賞 令和3年文部科学大臣学校保健功労賞

●執筆／「いのちのはなしグーチョキパー」(エイデル研究所出版)

●その他／・和霊公民館運営審議委員・更生保護女性会副会長・退職公務員連盟中央分会副会長

・和霊小学校読み聞かせボランティア・カサヨハネ(知的障害児)放課後デイサービス非常勤講師ほか

●趣味／陶芸・登山・写真・絵手紙・歩き遍路・シーボーンアート



もうりひろこ(著) みずせき ゆりえ(絵)
価格1,572円(税込)

南予の祭り歳時記

小原(西予市)の五ツ鹿踊り

愛媛大学地域協働センター南予 副センター長

おおもと たかひさ
大本敬久



1971年 八幡浜市生まれ、西予市在住。専門は民俗学・日本文化論。著書に『愛媛の民俗一冠婚葬祭編一』（愛媛県文化振興財団）。愛媛県歴史文化博物館勤務を経て、現在、愛媛大学地域協働推進機構特定准教授。



写真提供：清家昌弘

西予市宇和町小原の五ツ鹿踊りは、毎年10月の第2または第3日曜日の地区の秋祭りで奉納され、小原の十二所神社から神輿渡御の練り役として参加し、午後には岩木地区にある三瓶神社の祭礼にも練り役として参加する。

この小原の五ツ鹿踊りは、愛媛県南予地方に伝承される鹿踊りの歴史を考えるうえで、極めて重要な民俗芸能である。南予地方の鹿踊りは、元和元（1615）年に伊達秀宗の宇和島入部にとりなって東北仙台から多くの商人、職人も移住をしたことで伝えられた芸能であり、東北地方との歴史的なつながりを背景として宇和島城下に伝来し、そこから宇和島藩領内（現在の八幡浜市、伊方町以南、愛南町まで）の各地へ広がったものである。小原の五ツ鹿踊りは、その伝播の過程を江戸時代の文字記録によって具体的に確認することができる。

その史料が、小原村の庄屋記録である「清家日誌」である。同日誌には、宝暦5（1755）年9月の記事として、「一、九月、御神事ねり車相止、鹿舞初ル、頭取長右衛門、御城下へ参、相ならい申、頭ハ信濃いたし候」と記されている。ここには、それまで祭礼に出されていた「ねり車」（現在、吉田祭などで見られる人形屋台）をやめて「鹿舞」を始めたこと、その頭取である長右衛門が「御城下」すなわち宇和島城下へ赴いて鹿踊りを習ったことが記されている。

宝暦5年という江戸時代中期の時点で、宇和島城下から離れた地域に鹿踊りが伝わっていたのであり、逆にいえば、それ以前に宇和島城下では鹿踊りが確立し周辺地域に伝習させるほど有名な芸能文化になっていたことになる。宇和島城下では、

慶安2（1649）年に一宮祭礼（宇和津彦神社の秋祭り）の練物が始まった記録があり、さらに宝永3（1706）年の「龍光沙門伝照旧記」には、57年間使用した鹿頭が破損したため修理したとの記事がある。この記録からは、鹿踊りが1649年頃には宇和島城下の祭礼に存在していた可能性が高いと考えられている。

小原にはさらに、鹿踊の歴史を物質資料から裏付ける貴重な鹿面が現存している。寛政5（1793）年に宇和島城下で製作されたことを示す墨書が残る鹿面であり、小原の五ツ鹿踊りで使用されていたものである。これは現在確認されている南予地方の鹿面のなかで最も古いもので、西予市の愛媛県歴史文化博物館に保管されている。すなわち、小原には、宝暦5（1755）年の文字記録だけでなく、その約40年後に製作された寛政5（1793）年の実物資料も残されているのである。

この鹿面は、単に古い道具が残っているというだけではない。宇和島城下で製作された鹿面が小原で実際に使用されていたことは、鹿踊りが宇和島城下から藩領内各地へ伝播した具体的な動きを示す。小原村「清家日誌」の「御城下へ参、相ならい申」という記録と、寛政5年の鹿面という物質資料を合わせて考えると、江戸時代中期に宇和島城下を起点として鹿踊りが宇和島藩領内各地へ伝わっていったことが文字と実物の双方から確認することができる。

小原の五ツ鹿踊りは、地域の祭礼芸能として現在まで継承されているだけでなく、南予における鹿踊りの伝播と定着を具体的に示す貴重な文化遺産といえるだろう。

在宅医療について

—住み慣れた地域で安心して暮らすために—

在宅医療とは、病気や障害な

どによって通院が難しくなった方が、住み慣れた自宅や入居している施設などで受ける医療のことです。医師や看護師などが患者さんの生活の場を訪問し、病気の治療や健康管理だけでなく、療養生活そのものを支えます。

在宅医療には、主に「訪問診療」と「往診」があります。訪問診療は、通院が難しい患者さんに対して、あらかじめ診療計画を立て、定期的に医師が訪問して診療するものです。一方、往診は、急な体調の変化などがあつた際に、患者さんや家族からの依頼に応じて医師が訪問して診療するものです。

在宅医療は慢性疾患や障害のある方、がんの療養をしている方、医療的な処置が必要な方など、さまざまな患者さんが利用できます。血圧や糖尿病などの管理、薬の調整、在宅酸素療法、点滴、床ずれの処置、栄養管理など病状に応じた医療を受けることができます。また、「最期まで自宅で過ごしたい」という希望に寄り添い、看取りを支えることも在宅医療の大切な役割です。在宅医療では、医師だけでなく、訪問看護

師、薬剤師、ケアマネジャー、訪問介護員、リハビリテーション職など、多くの専門職が連携します。病院とも情報を共有し、入院から退院後の在宅療養まで切れ目なく支援することが重要です。宇和島市でも医療・介護関係者が連携して、住み慣れた地域で自分らしい生活を続けられる体制づくりが進められています。

宇和島地域では、在宅医療を地域全体で支える取り組みの一つとして「宇和島地域在宅医療支援センター」の整備が進められています。宇和島市の在宅医療・看護・介護の関係者による連携の中で、医師会のバックアップを受けながら、「退院支援」「療養支援」「急変時対応」「看取り」という4つの機能を強化し、地域で医療を完結できる体制を目指しています。

例えば、病院での治療を終えて自宅に戻るときには、病院の医師や看護師、在宅医療訪問看護師、ケアマネジャーなどが連携して、退院後の生活を整えます。在宅療養中に病状が変化した場合には、必要な医療につなげ、入院が必要かどうかを判断します。また、人生の最終段階では、本人の希望を尊重しながら、家族も含めて支援します。

健康は、失って初めてその大切さに気付くことが多いものです。健康診断は、「今の健康状態を確認する作業」であると同時に、「未来の自分を守るための投資」でもあります。忙しい日々の中でも、定期的に健康診断を受け、自分の体と向き合うことが大切です。

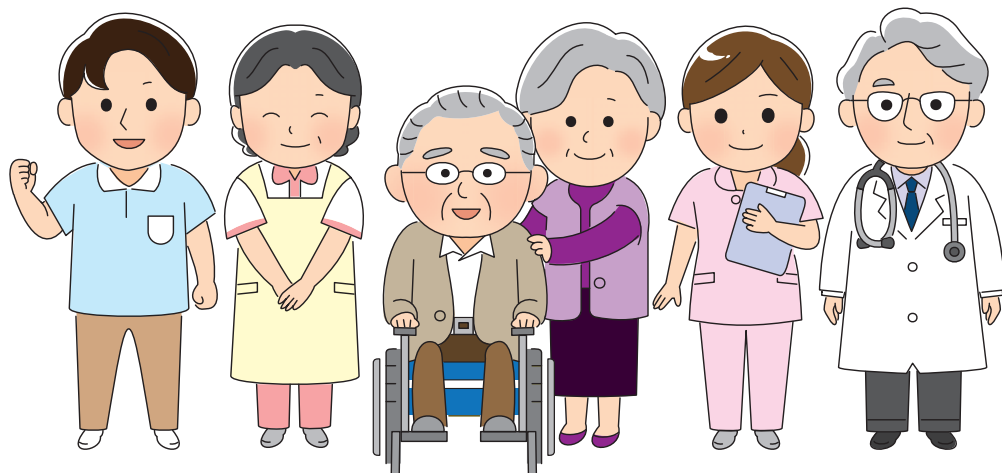
在宅医療を利用したいと思ったとき、「どこに相談すればよいのかわからない」と感じる方も少なくありません。そのような場合は、まず、かかりつけ医、病院の相談窓口、ケアマネジャー、地域包括支援センターなどに相談してみましよう。宇和島市では、地域包括支援センターを中心に、在宅医療・介護に関する相談や関係機関との連携も進められています。

在宅医療は、「病院に行かない医療」ではなく、医療を受けながら、住み慣れた場所です。その人らしく暮らすための医療です。どこで療養したいのか、どのような生活を送りたいのか、最期をどのように過ごしたいのか。元気なうちから家族や医療・介護の専門職と話し合っておくことが、安心した在宅療養につながります。宇和島地域でも、さまざまな専門職が力を合わせ、住み慣れた

た地域で安心して暮らせるよう支える取り組みが進んでいます。



沖内科クリニック
副院長 沖 良隆



お月見だんご

【材 料】 6 個分

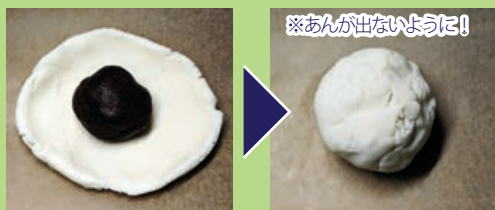
もち粉	・・・100g
小麦粉	・・・大さじ1強(10g)
塩	・・・小さじ1/3
さつま芋	・・・40g(正味)
水	・・・100ml 程度
あん	・・・150g

【作り方】

- ① あんは、6 個に丸めておく。
さつま芋は、茹でてつぶしておく。
- ② ボウルにもち米、小麦粉、塩、さつま芋を入れて混ぜ、水を少しずつ加えてよく混ぜ合わせる。



- ③ 粉っぽさがなくなってきたら、今度は手でしっかりこねていく。(耳たぶの硬さ程度)
- ④ なめらかな生地になったら、6 等分にして丸め、平たく伸ばして「あん」を包む。



- ⑤ 鍋に湯を沸かし、10 分程度ゆでる。
だんごが浮いてきたら、網じゃくしですくって取り出す。



- ⑥ クッキングシートを敷いたバットに並べ、冷めたら片栗粉をまぶしてカップに入れる。
(よく冷めてから取り扱うのがコツ)



秋は、夜空の空気が澄み、年間を通して月が一番美しく見える季節と言われています。月を愛でる行事と言えば、やはり「お月見」！そこで今回は、伝統行事や行事食について考えてみます。

そもそも「行事食」とは、季節折々の伝統行事の際にいただく料理や特別な行事のときにいただく華やかな食事のことをいいます。

しかし、近年、こうした伝統行事（年中行事）や行事食は、少しずつ廃れつつあるように感じています。「お正月のおせち料理」「土用の丑のうなぎ」など、商いと結びついているものは、各商店の宣伝効果もあって、中食（なかしょく）として手軽に楽しめる形で根強く残っています。

一方で、七夕飾りをしなかったり、冬至にかぼちゃを食べなかったりと、というっかり忘れてしまうことも多くなってきているのではないのでしょうか。

これは、もともと「神への感謝」「作物の豊作や家族の健康祈願」「滋養強壮」などを目的として行われていた行事が、現代の暮らしには必ずしも当てはまらなくなってきているからではないかと考えます。

秋の風物詩である「お月見」も、その一つです。本来お月見は、十五夜（中秋の名月）に、農耕の神であり月の神である月読命（つくよみのみこと）にススキや月見だんご、里芋などをお供えし、収穫の感謝と翌年の豊作を祈願する行事と伝えられています。しかし、農業に携わっていない人にとっては、少し縁遠いものと感じられることもあるでしょう。

「行事は楽しむもの」これは、昔も今も共通です。昔に思いを馳せながら、美しい月を眺め、だんごを味わう…。そんな風情を感じるひとときを、これからも大切に伝えていきたいものですね。



和田 広美

管理栄養士
柑橘ソムリエ
シーフードマイスター
愛媛大学地域再生マネージャー

お気楽 俳句

俳句って難しそう、俳句を詠む人たちって頭硬くて、冗談言うと叱られそうとか思っていますか？
いえいえ、それは大きな誤解です。俳人は好奇心旺盛、行動的で愉快な人たちがとても多い。

俳号「神楽坂リンダ」さんもそのお一人。ウィットとユーモアに富み、お洒落で前向きで、とても素敵な女性でした。過去形なのが悲しいですが、遺された二冊の句集にそのお人柄を偲ぶことが出来ます。

(小野更紗)

マスクしたままさよならはないでせう

たんぽぽの絮吹くときは少女の眼

落椿そこはポルシェをとめるとこ

さみしさのきしきし剥がす春キャベツ

薔薇ひらくはやさで年をとるなんて

寂しくて入るローソン星月夜

なんにでも振つて革命たうがらし

ぶつてくださいその百合の花束で

髪一本くべて憂国春火鉢

あすひらく鉄砲百合のごとくある

神楽坂リンダ『りんご飴』より

細胞といふ名の個室小鳥来る

グローブのやうなジャムパン小鳥来る

肋骨に番号ありぬ冬雲雀

ひきたし
抽斗のひとつは奈落春落葉

りよくん
緑蔭へ翼のやうな犬の耳

ゆるやかに病衣まとひてクリスマス

空き瓶を吹けばシリウスおりてくる

しゅんしゅ
本を入れ春愁を入れ旅靴

春愁やキューピーの背に小さき羽

マスクもうはづさうかも海だから

神楽坂リンダ『四十雀』より

*色文字は季語 ルビは編集部

句集はいつでもマルコポ、コム刊

構成：小野更紗

1987年より宇和島市在住 息子の俳句甲子園出場を機に俳句を始める いつき組 じゃこ天句会(毎月第1金曜日7時より鶴島公民館)



*つやす：つやす

絵：律川エレキ

1966年宇和島市生まれ 奈良市在住 2000年頃より俳句新聞や雑誌「100年俳句計画」等に挿絵を描く。映像作家 俳号大塚桃ライス

おすすめの本

「永遠の記憶」 東野圭吾 著 文芸春秋 刊 2,310円(税込)

今年7月に東野圭吾さんが亡くなりました。68歳でした。1985年に小説家デビューして40年、104作目になるこの作品「ガリレオシリーズ第11作」が遺作になってしまいました。8月5日の発売から、わずか10日余りで5刷43万部とのこと。

当店では入荷待ちの日が続き、お待ちいただいたお客様も多かったです。

事件は内海薫刑事が70歳の老人に刺されたことから始まります。もちろんガリレオ先生の推理が事件の謎の扉を開き、今回も期待を裏切らない展開です。

文庫になるのは約2年後です。活字が大きいハードカバーでどうぞ!!



協力：岩崎書店 宇和島市錦町4-16 TEL. 0895-22-0528

つなぐ美術館

■アトリエ堀端絵画教室（べにばら画廊）

宇和島市本町追手 2-8-6 TEL. 0895-22-1104 コメント：吉田 淳治



『大きなおしろ』（マーカー・水彩）
作者：片岡芽生・西谷咲里（こどもクラス）

大の仲良し、めいちゃんといみりちゃん。
こんなかわいいお城に住めたらなあ。
2人の合作、次々と浮かぶアイデア。
どんどん手が動きあふれて止まらない。
こんなふうに生きた絵が描けていいなあ！



作品名：『自分の顔』（クレパス・水彩）
作者：赤城響一（こどもクラス）

「くちびるを描いたときおもしろかった」
そう言うきょういちくんは全く同感！
この絵の魅力はここから全体に響いてる。
額縁となった鏡の枠、本棚の配置も絶妙。
大人びた色使いはシックで美しい。



作品名：『キッチンハーモニー』（油彩）
作者：金谷裕美（大人クラス）

対象物がある具象画に必要な観る根拠。
金谷さんは“見る”よりも“感じる”方が？
画面に時折顔を覗かせるファンタジー。
ならばその世界を臆せず広げてみたい。
この絵は辛抱して描いたリアリズム？

INFO

■アトリエぱれっと GARO. <https://art-palette.wixsite.com/mysite>

宇和島市泉町 2-2-10 TEL.090-7784-4703 yuka@art-palette.com コメント：清家由佳



作品名：『初夏の小日提湾』（水彩）
作者：富田 満久

紙の白地を光として、雲の動きや水面のキラキラした様子が清々しく伝わってきます。様々な景色を絵にして見せていただけるので教室の皆さんも楽しみにしています。



作品名：『静かな朝』（油絵）
作者：中橋 徳文

霧水で白くなっている木々を見ていると、作者の白い息まで見えてきそうで、冬の静かな朝の雰囲気伝わって、気温まで感じられる作品です。



作品名：『小樽』（水彩）
作者：深谷 幸雄

小樽の赤煉瓦が運河の水面に映り込んだ表現がとてもいい感じです。深谷さんは、いつもコツコツと穏やかに絵を描き続けています。これからの作品が益々楽しみです。

GARO.
ギャラリー情報

■「森&渡辺二人展」9/30～10/9 ■「秋の空 6人展」10/21～25 ■「三人展」7/22～26 ■「兵頭俊彦（陶芸）展」11/3～8
■「河野 甲展」11/11～19 ■「宮川淳一郎展」11/26～12/3 ■「石山彰子展」12/9～13 ■「まつうらあきお展」12/15～20

「宇和島の『当たり前』は、世界のごちそう」



皆さまの食卓に、じゃこ天は、どのくらい頻度で登場しますか。そのまま一枚、軽く炙って一枚、うどんに載せて一枚・・・スーパーにも道の駅にも当たり前になり、おやつにもなる。宇和島に暮らす私たちにとって、じゃこ天は空気のような存在です。私も昭和27年創業、宇和島市三間町の蒲鉾屋です。まわりは見渡すかぎりの田んぼで、朝は川のせせらぎとカエルの大合唱を聞きながら、その「当たり前」を74年間続けてきました。

人まで、じゃこ天が当たり前になり、食卓に上る町。郷土の味が博物館入りせず、現役で暮らしの中に生きている——これは、胸を張って誇れることだと思っております。じゃこ天の主役は、宇和海で獲れる小魚「ほたるじゃこ」（地元では「はらんぼ」）。この魚が獲れる海が目の前にあるからこそ、一匹一匹手で捌いて、石臼で練って、その日のうちに揚げられる。手間のかかるやり方ですが（笑）、かまぼこ屋だけに粘り強く続けてきた甲斐あって、今年6月には「ハランボじゃこ天」が農林水産大臣賞をいただきました。宇和島の日常の味に、日本一のお墨付きがついたのです。

そのすごさを教えてくれるのは、いつも外から来たお客様です。先日、じゃこ天作り体験にスイスからのご家族が、すり身をハート型にこねて、揚げたてを「Oshiii」と、ほおばる笑顔のまぶしいこと。「次は宇和島城へ行く」と言つので、宇和島なまり全開の日本語で見どころを案内したら、お子さんたちが目をきらきらさせて頷いてくれました。はるばるモルディブからのお客様や昨年出店した大阪・関西万博でも、じゃこ天は大好評。世界中の人が、わざわざこの町の味を目当てに来てくれるのです。

そして、宇和島の宝物は、じゃこ天だけではありません。鯛や真珠を育む宇和海、現存天守の宇和島城、闘牛に三間の田園風景。外のお客様が目を輝かせるたび、「まだ私たち自身が気づいていない魅力が、この町にはたくさん眠っているんじゃないか」と思われます。



地方には、まだまだ可能性がある。それを掘り起こして伝えるのも、地元で商売をさせていただく者の役目だと思い、じゃこ天作り体験や工場見学、かまぼこ板美術展、YouTubeでの発信などに取り組んでいます。

最後になりましたが、うわしん若手経営塾では、経営の学びとともに業種を超えたたくさんの方との出会いをいただきました。

皆さま、帰省のお土産に、県外のご友人への贈り物に、どうぞ胸を張って「宇和島のじゃこ天」を自慢してください。それが私たちの何よりの誇りであり、励みです。宇和島へお越しの際は、カエルの合唱をBGMに、従業員一同いい顔をしてお待ちしております。

有限会社 安岡蒲鉾店

〒798-1133 宇和島市三間町中野中 293 TEL: 0895-58-2155

0120-58-7771



うわしん「南予活性化若手経営塾」とは、宇和島信用金庫において1年間、南予地域の産業活性化をはかるために創業者や2代目、3代目の若手経営者を育成し、企業経営体質の健全化・成長のためのセミナー・個別指導・異業種交流等をおこなっていて、地域内の中小企業の経営レベルを向上させる目的で開講されています。

きさいやくん 20

オザワヒロ

サスペンスドラマ
方言デカ



宇和島警察署様、毎日ご苦労さます。
ちょっとふざけてしまいました、すいません ^^;

*1) 「つんぷりかえる」→「ひっくり返る」
*2) 「いぬる」→「帰る」 いずれも宇和島地方の方言



作者プロフィール

本名/城内 章 1957年 宇和島生まれ 愛知県在住
宇和島南高等学校卒 職業/イラスト絵本作家
趣味/音楽活動
著書に「のらとおばあちゃんの虹」

Tosyu Hyappen

斗酒百篇



最高金賞
ベストカテゴリー賞
TMSC2024 焼酎部門

無割水 まだこ (芋・麦)

1800ml 〈芋〉4,246 円 (税込) 〈麦〉4,048 円 (税込)

酒蔵 王手門 宮崎県日南市北郷町大藤甲 898-8

通常は割水をしてアルコール度数を調整しますが、
この「まだこ」は一切割水をせずに 30 度に蒸留し、
まわりつくような芳醇で濃厚な味味を実現しました。
まさに、名前の通り「まだこ」のように
まわりつく感覚を覚えます。

は し 土師 酒店

宇和島市広小路 2-58 ☎ 0895-24-7888

営業時間：10:00 ～ 20:00 定休日：日曜日

※斗酒百篇 (としゅひゃっぺん) とは たくさんの酒を飲みながら、たく
さんの詩を作ること。 古代中国の唐の時代、数多くの詩を作った李白の
ことを杜甫が『飲中八仙歌』の中で褒め称えた言葉。 題字/矢間大蔵

**満期時
来店不要！
手続不要！**

うわしん 自動解約付定期積金

金利	〈期 間 1年〉	年 1.10%
	〈期 間 2～3年〉	年 1.20%
	〈期 間 4年～5年〉	年 1.30%

対 象 個人・法人

期 間 1年、2年、3年、4年、5年

金 額 1,000円以上（1,000円単位）

掛込み方法 毎月掛込み（自動振替）

〈注意事項〉

- ・本商品は預金保険制度の対象商品です。
- ・中途解約の場合は金庫所定の解約利率を適用し、お手続きが必要となります。
- ・金利は税引き前です。お受け取りになる利息については復興特別所得税が追加課税され、20.315%の税金がかかります。
- ・新規ご契約の際には、お手続きが必要です。
- ・詳しくは商品概要説明書をご覧ください。

うわしん **LINE 公式アカウント**
お友達登録でお得な情報ゲット！

令和8年8月7日現在

「つなぐ」は、こちらでどうぞ

【宇和島】 ● 宇和島市（本庁、中央図書館、生涯学習センター、パフィオうわじま、中央公民館、市立宇和島病院、伊達博物館、歴史資料館）
 ● きさいや広場 ● シロシタ ● 福 DON ● 宇和島商工会議所 ● 沖内科クリニック ● かどや（駅前本店・弁天町店） ● ハイウェイレストラン宇和島
 ● 和日輔 ● 盛運汽船 ● 岩崎書店 ● 木屋旅館 ● はまゆう薬局 ● ひまわり薬局 ● JR宇和島駅 ● ペにばら画廊 ● アトリエぱれっと GARO.
 【宇和島信用金庫】（本店営業部・恵美須町支店・新橋支店・吉田支店・南宇和支店・城南支店・来 支店・三間支店・卯之町支店）
 【吉 田】 ● 吉田支所 ● 吉田公民館 ● 吉田図書館 【三 間】 ● 三間支所 ● 道の駅みま ● 畦地梅太郎記念美術館
 【津 島】 ● 津島支所 ● 市立中央図書館 津島分館 ● 南楽園 ● 小野商店 【鬼北町】 ● 森の三角ぼうし ● 奈良山等妙寺歴史交流館
 【愛 南】 ● ゆらり内海 【市外・県外】 ● JR松山駅 ● 香川・愛媛 せとうち旬彩館（東京） その他
 「つなぐ」の発行は、新春号（1月）、春号（4月）、夏号（7月）、秋号（10月）です。

「情報誌つなぐ」は
宇和島クラブに協賛しています。



宇和島信用金庫
—— この街が好き、この街と未来を拓く ——

※「つなぐ」バックナンバーは
宇和島信用金庫ホームページ・でご覧いただけます

